

# 共同研究 内なる異文化としての「老い」 中間報告

鵜飼 正樹

わたしたちは、日々老いている。

もはや中年期にさしかかったわたしにとって、それは、いやおうなく自覚し、直面せざるをえないことである。肌は弾力性をうしない、疲れはとれなくなり、身体のアチコチが痛くなる。かつてはできたはずのことができなくなる。

この、なんともやっかいな「老い」に、文化人類学と臨床心理学のふたつの学問からアプローチしてみたら、どうだろう。それが、この共同研究の出発点である。

「わたしが老いる」とは、どのようなことなのか？ 「人はだれしも老いる」という一般論ではなく、わたし自身が主体として老いること。この共同研究では、それを、それぞれの学問的立場から考えていきたいのである。

わたしにとって「老い」とは、外から来るものではない。わたしのうちから何かが発現していくことが「老い」である。けれども、その何かは、わたしにとってどこか親しみのもてない、なにやら居心地のよくないものである。しかし、その何かと、わたしはわたしなりに折り合いをつけて生きていかなければならない。「老い」をわたしなりにどう位置づけたいのか。「老いるわたし」を、わたし自身の腑におちるようにしたい。

「老い」を「内なる異文化」と考えてみたらどうか、という思いつきを糸口に、共同研究として、さまざまな「老い」のありさまを知り、「老い」について認識を深めていきたいと考えている。

この共同研究は、2002年度より開始し、以下のように研究会をかさねてきた。

2002年7月17日

『内なる異文化としての老い』研究・序説  
鵜飼正樹（文化人類学科助教授）

2003年2月14日

「特別養護老人ホームの日常」  
廣田有里子さん（特別養護老人ホーム・ケア  
ワーカー）

2003年9月19日

「本学が誇る異能教員・老人ホームのスーパー  
アイドル南條まさきと老人ホームに行こう！」  
（公開講演会として開催）

2004年2月27日

「臨床心理学の老い」  
高石浩一（臨床心理学科教授）  
「仏教と老い」  
平岡聡（臨床心理学科助教授）  
（公開講演会として開催）

以上のうち、2004年2月27日の研究会（公開講演会）には、これまでの研究会にはないほどの多数の学生・市民の出席があり、共同研究者一同、「老い」についての関心の強さをあらためて認識した。

本年は、3年目を迎え、さらに研究会を重ねるとともに、研究のまとめ、対外的な発信にむけての取り組みにつとめたい。